エッセー

全カリで考え続けた「平等」理念

河東田　博

2014年3月31日をもって12年間勤めた立教大学を退職することになりました。本誌を通して、お世話になった皆様に心からの感謝の意を伝えたいと思います。

立教大学に赴任後、初年度に持った科目の中に全カリ科目「福祉の近未来」がありました。250人前後の受講生だったように思います。受講生の中に立教池袋高校の3年生もおり、いつも最前列で受講していました。この学生は、授業後毎回のように質問をしに来ていました。質問していただくことで、お互いに内容を深め豊かにしていくことができるということに気づかされました。私は、毎回、（恐らく）この学生に向かって、私の考えていることを伝えようと一生懸命準備をし、授業を展開していたように思います。この学生はその後本学の経済学部に進み、今は企業勤めをしながら実社会で大活躍しているようです。

上記のような経験を通して、他学部学生に福祉の心を伝えるという全カリの魅力に引き付けられ、毎年のように全カリ科目を担当させていただくようになりました。毎回300人前後（多いときには500人）の学生たちを相手に授業をしていましたので、毎回が講演のようでした。それだけ手抜きのできない真剣勝負の時間でした。

全カリで私は何を伝えようとしてきたのでしょうか。人権、ノーマライゼーション、多文化共生、当事者支援、等々のキーワードをあげることができますが、これらのキーワードは、「平等」という二文字に集約できるかもしれません。この「平等」理念は、5年間滞在したスウェーデン社会から学んだものです。日本にだけ住み暮らしていたのでは知りえなかった理念だったと思います。特に戦後ベビーブーム期に生まれた団塊の世代の私たちは、社会全体がそうであったように、常に競争を強いられ、勝ち抜いていくことを求められて育ってきましたし、そのことを当たり前のように受け入れていたからです。

しかし、時代は少しずつ変わり始め、1970年代後半に入ると、北欧で、欧米で、女性解放運動や障がい者解放運動が起こり、社会平等理念が紹介され、「平等とは何か」を考えるようになってきました。私が勤めていた障がい者施設で言えば、入所施設批判と脱施設化につながるノーマライゼーション理念が紹介され、「平等」理念にも強い関心を持ち始めるようになりました。後に、女性解放運動も障がい者解放運動もノーマライゼーション理念も人権思想と平等理念からもたらされていることを知るようになりました。

関心を持つようになると行動が伴うようになります。北欧の平等理念と深く関わる様々な取り組みが北欧でどのように展開されているのかを知りたくて、1983年の夏、家族4人（妻と2人の子ども）で、1ヶ月間、なけなしの金をはたいてスウェーデン・ストックホルムにアパートを借りて生活するこ

とになりました。この時の経験がその後の人生を決めてしまったようです。ストックホルムの1ヶ月間は、それだけ衝撃的でした。何もかもが違っていましたが、新鮮で、目から鱗が落ちる経験となりました。と同時に、多くの宿題を抱えて帰ってきました。そのため、私は、家族を説得し、3年後に、長期滞在をするために再び家族と共にスウェーデン・ストックホルムを訪れることになりました。苦節の連続でしたが、家族が共に助け合いながら、5年間無事に滞在することができました。そして、何とか初期の目的を達成して帰国することができました。

スウェーデンで学んだことは、「平等」理念をどんな領域の人たちにも適用することの大切さです。その一つが「ノーマライゼーション原理」だったと思います。そして、「ノーマライゼーション原理」を構成する要素の中核をなす「自己決定」であり、「当事者参画」でした。つまり、私たち専門家が作り上げて行く福祉ではなく、当事者たちが中心となって作り上げて行く福祉でした。当事者たちが自分たちの言葉で、社会にむかって「平等」を主張する取り組みへの支援でした。

私は、1986年から1991年までの5年間に学んだこと、私なりに会得したこと、伝えたいと思ったことを、その後のスウェーデンの情勢や日本の状況を踏まえながら、両国の比較を通して、全カリの中で繰り返し伝えてきたように思います。

「平等」の延長線上には（誰をも分け隔てることのない）「多元的共生社会」があります。全カリを通して伝えようとしたこの理念を退職後も可能な限り考え続け、伝え続けて行きたいと思います。長い間、学び合い、語り合いの機会を与えて下さった全カリ関係の皆さんに改めてお礼を申し上げ、退職にあたっての最後のエッセイとします。

かとうだ　ひろし
（本学コミュニティ福祉学部教授）